

品種と技術、その後 . .

飼料用サトウキビ「しまのうしえ」の普及に向けた取り組み

【南西諸島での飼料確保】

南西諸島では、サトウキビ栽培とともに肉用子牛生産が盛んです。しかし、飼料用の畑が少なく、また、台風や干ばつなどの厳しい気象条件により、粗飼料が不足しがちです。そのため、生産量が多く、台風にも強い飼料作物が求められています。飼料用サトウキビは、これまでの牧草の約2倍の生産量があり、これらの問題解決に貢献できる新しい飼料作物として期待されています。飼料用サトウキビ品種「しまのうしえ」(写真1)は、奄美・沖縄地域でのサトウキビ重要病害である黒穂病に対する抵抗性を改良した品種です。この品種の育成により、当地域での飼料用サトウキビの利用が可能となりました。

【普及に向けた取り組み】

鹿児島県徳之島町では、この品種の導入を契機に、飼料生産組織およびTMRセンター(牛が必要な栄養を全て摂取できるように、粗飼料、濃厚飼料、ミネラル、ビタミンなどを混ぜ合わせた混合飼料を生産する施設、写真2)が設立され、島内飼料自給率向上に向けた取り組みが進んでいます。そこで、鹿児島県、徳之島町と共同で、奄美地域における飼料用サトウキビの栽培技術、飼料用サトウキビを活用した発酵TMRの利用技術を開発しました。得られた成果は、「飼料用サトウキビの栽培マニュアル」、「飼料用サトウキビを活用した発酵TMR調製・給与マニュアル」にとりまとめ、当センターのウェブで公開しています(http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/laboratory/karc/other/index.htmlに掲載)。

また、技術開発の一方で「しまのうしえ」を普及する取り組みも行われました。徳之島町では現在

20haで「しまのうしえ」が栽培され、飼料用サトウキビ主体の発酵TMRの生産と販売が始まっています(写真3)。近年の購入飼料価格の高騰が県内の畜産、とくに酪農家の経営を圧迫している沖縄県でも県の事業として酪農向けの自給飼料生産に取組み、その中で飼料用サトウキビが検討されています。飼料用サトウキビでは、使用できる除草剤や殺虫剤がないことが普及する際の問題となっています。そのため、これらの登録に向けた試験も行われています。沖縄県では県内2つのモデル地区で「しまのうしえ」の普及に取り組んでいます。

【これからの飼料用サトウキビ】

このように「しまのうしえ」は、南西諸島における肉用牛の子牛生産や酪農を革新するキーテクとして現地の関心は高く、着実に普及しています。今後、さらに飼料用サトウキビの普及を進めるためには、生産安定につながる耐病性品種の育成、さらには飼料用サトウキビだけでなく牧草も含めた南西諸島の飼料生産組織に役立つ技術を開発する必要があります。

【畜産草地研究領域 服部 育男】

【作物開発・利用研究領域 境垣内 岳雄】



写真1 飼料用サトウキビ「しまのうしえ」



写真2 徳之島町のTMRセンター



写真3 飼料用サトウキビの収穫